

生命を表現する教育課程

莊 司 泰 弘

The Curriculum in Presentation of Life

by

SHOUJI Yasuhiro

(Received May 15, 2002)

キーワード：教育課程 生命 表現

I. はじめに

本研究は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「韓国の幼児の表現活動と文化的背景の関連性に関する教科教育内容研究」における「幼児教育の教育理念・教育課程の研究」の分担研究である。韓国の幼児教育における表現活動の教育理念・教育課程と活動内容を明らかにし、歴史的・民族的な文化背景との関連性を考察するものである。

本論文は日本と韓国における生命に関するカリキュラムがもたらす効果を検討する事、並びに、問題をもたらしした要因と今後検討を重ねる必要のある事項を明らかにする事を目標とし、生命に関するカリキュラムの在り方を考える事を目的とする。

「韓国幼稚園教育の目的と目標は、1949年に法律第86号として公布された教育法第5章第16節、第146条および147条に、“幼児を保育して適当な環境を与え、心身の発育を助長することを目的とする”と示されている。日本が昭和22年(1947)に学校教育法(法律第26号)第77条に“幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする”をそのまま移植し、今日まで(1986年)ほぼ30年も何ら再検討もなしに継承している。韓国の多くの幼稚園の教育内容と方法は日本式教育から、未だに解放されない遺産を抱えている。韓国の歴史意識、状況認識、韓国の特殊な立場を反映した自立的目的と目標が定められないことにより、教育内容と方法が方向を見失った。その結果、唯一、幼稚園教育だけが教育価値を疑われたり、国際比較においても著しい遅れを見せている。日本が36年間、韓国を植民地として支配する過程により、異民族である我々にこのような深刻な影響を与えている。また、解放後(戦後)から今日まで、就学前教育に対する育成が、国民学校(小学校)義務教育に押されている。幼稚園教育の必要性が軽視され、未だに幼稚園が正当な地位を得られず、放置されている」と金玉蓮(1986)が指摘しているように、日本の幼稚園教育要領追従が継続されている。しかし、日本が昭和39年(1964)、平成元年(1989)、平成10年(1998)に幼稚園教育要領を改訂したのに対し、韓国では1992年(第5次)、2000年(第6次)と頻繁に改訂されている。

教育部（1998）によると、「第5次の改訂では、教育部が初めて韓国幼児教育学会に研究・開発を依頼し、幼児教育専門家と数回の各市道（県）の幼稚園教育関係者協議会を通して、第4次幼稚園教育要領の問題点を補い、新しい幼児教育内容を反映して改訂、公示された。第5次幼稚園教育要領の特徴は、1991年に教育法が改正され、幼稚園入学年齢が従来の4～5歳から3～5歳へ変更され、1992年3月より3歳児の入園が定められ、教育課程の水準がⅠ水準とⅡ水準に区別されたことにある。また、第5次幼稚園教育要領が適用された1995年から、地方自治体による教育自治が実施されたので、社会的実情も反映された。幼稚園教育課程も地域化を強調し、市道教育委員会と幼稚園は国家水準教育課程を基礎として、各自が課程編成、運営指針や幼稚園教育課程を備え、各地域の実情にふさわしい教育を求めている。働く母親の増加による幼稚園24時間運営を要求し、社会的要求を教育課程に反映した。幼児の発達特徴にふさわしい読み書き教育に関する指針を具体的に示し、親の要求も教育課程に反映しようとした。教育現場の要求を受け入れるために教育課程の全領域に他人と共生する知識、技術、態度を習得する社会的関係と基本的生活習慣を重視した。第5次幼稚園教育要領は、前回の教育要領よりは韓国社会が幼児教育機関に期待する要求にこたえようとかなり努力した。第5次幼稚園教育要領は、教育法に明示された幼稚園の目的と目標を基本として、健康な人、自主的な人、創意的な人、道徳的な人を理想的な人間像として追求し、基本的生活教育の重視、幼児の興味、要求、個別性の尊重、遊び中心教育、幼児の全人的成長発達などを教育課程の中心にして構成した。教育課程の領域は、第2、3、4次教育要領が発達領域別に構成されたのに対し、健康生活、社会生活、表現生活、言語生活、探求生活の5つの生活領域で構成した。従来、教育課程を現場で適用しながら、発達領域の目標を直接に教育活動につなげることの難しさを経験した教師達に指針と明瞭性を与えるためである。すなわち、教育目標は全人的発達の方向から区分し、教育内容は生活領域に選定して提供した」とあるように、日本の昭和39年（1964）と平成元年（1989）の幼稚園教育要領との中間的内容になっている。

教育部（2000）によると、現行の第6次幼稚園教育要領は下記の内容になっている。

●教育課程の特徴

1. 国家水準の共通性と地域、幼稚園、個人水準の多様性を同時に追求できる教育課程である。
2. 幼児の自立性と創意性を伸張するための教育課程である。
3. 教育庁と幼稚園、教員、幼児、父兄がともに実現する教育課程である。
4. 幼稚園の教育体制を教育課程中心に改善するための教育課程である。
5. 教育の過程と結果の質的水準を維持、管理するための教育課程である。

●教育課程の領域

健康生活、社会生活、表現生活、言語生活、探求生活

●ねらい

- ・基本的生活習慣——礼儀正しい生活、ルールを守る生活、節約する生活
- ・個人生活——自分に肯定的に考える、感情と欲求をコントロールする、自分のことを計画して実行する
- ・家庭生活——家族とむつまじくする、家族と協力する

- ・ 集団生活——他人を理解して尊重する、公共ルールを理解して守る、仲間の大切さを知る
- ・ 社会現象と環境——周辺地域に関心をもつ、仕事に関心をもつ、経済生活に関心をもつ環境保護に関心をもつ、我が国の象徴と伝統に関心をもつ
祖国統一に関心をもつ、諸国の文化に関心をもつ、情報資料
関心をもつ

●表現生活

1. 特徴

「表現生活」は幼児にとって、自然と事物との芸術的要素を探索、鑑賞し、自分の考えと感じを多様な活動を通して自発的、創意的に表現することによって芸術に対する関心、表現能力、美的価値を伸ばし、情緒的な安定感をもたせる領域である。

この領域は「探求」、「表現」、「鑑賞」で構成されている。「探求」では、音形、動きを観察して関心をもたせる。「表現」では、いろいろな音造り、歌唱、リズム楽器演奏、描画、造形と飾り、動きの表現、統合的な表現、劇遊びを通して、自分の考えや感じを創意的に表してみる。「鑑賞」では音楽鑑賞、自然と事物および造形作品の鑑賞、舞踊鑑賞、劇遊びの鑑賞、芸術的表現の尊重、伝統芸術に親しみを感じ審美的経験をもたせる。

この領域は特定の芸術的概念や技能を学ぶより、物事を見たり、触ったり、感じたり身体を動かしたりなど、能動的な学習が行われるようにする。また、幼児の考えや感じを自由に表現できるように、結果よりも活動過程を重視する。

この領域では幼児が自分の興味や能力にあう活動を選ぶように、多様な音楽、造形動作、劇活動を個別的、統合的に提供する。このような活動を他の領域内容と統合して指導することが望ましい。

2. 目標

自然と事物の芸術的要素に対する関心、創意的表現能力、審美感を培い、情緒的に安定感をもつ。

1. 自然と事物の芸術的要素を探索することで関心をもつ。
2. 多様な活動を通して表現することにより、創意的表現能力を培い、情緒的安定感をもつ。
3. 自然と事物および多様な作品を鑑賞することによって、豊富な感性と審美感を培う

韓国の現行第6次幼稚園教育要領と日本の平成10年幼稚園教育要領は、各々第5次幼稚園教育要領と平成元年幼稚園教育要領に若干の改訂を加えたものである。韓国の場合、「我が国を表す象徴」、「伝統文化、生活風習、伝統民族遊び」、「環境汚染」が強調され、日本の場合、「戸外活動の推進」、「高齢者、地域との関わり」、「文字への興味関心」、「楽しさの強調」、「自己表現」、「柔軟な指導」、「幼稚園全体の教師による協力体制」、「障害のある幼児との交流」、「子育て支援」という項目が改訂付加されている。

韓国と日本に共通する改訂付加項目として、「自然との関わり」、「創意工夫」、「自己管理抑制」、「多様な活動提示」、「共に過ごす喜び」、「生命の尊さ」が挙げられていることが重要である。両国の現行幼稚園教育要領の基調として、自然が有する秩序や柔軟性、生命の喜びをテーマとする方向性が読みとれる。今後の韓日教育課程のポイントとして下記の2項目が抽出できよう。したがって、本論文では生命遊びに焦点を当て、生命を表現する教育課程を考察したい。

1. 自然による生命の教育
2. 生命による「思いやり」や「やさしさ」の表現

II. 生命化

韓国の文化と我が国の文化を比較すると、韓国の文化が活力に溢れている点が浮き出てくる。活力の源を推測するに、「解放後（1945年8月15日、光復、日本植民地解放で光が戻る）伝統社会はかなり薄れた。解放前は自給自足を目標に農業経済体制であった。近代化は日本が主導権を有していたため、むしろ、近代化は先祖伝来の儒教倫理と風習にかかわる反作用を誘発した。したがって、身分意識も根強く残り、家族集団は伝統的家族構造や機能面でほとんど変化しなかった。相変わらず、数世代の大家族が一軒に同居し、氏族集団の団結力は継続して強化された。家父長制の継承による男児の待望、男女児差別教育も踏襲された」と柳岸律（1986）が記しているように、韓国の大家族と日本の核家族の差が現れたものと考えられる。しかし、子ども達がどのような環境で生活し、何を学んでいくのが今後の問題となる。韓国も日本も子ども達は幼稚園の時期から学習塾に通い、家にもってTVゲームをしている現状を見てきた。情操が育つ幼児期に知識技能を優先し、体験を積み重ねる幼児期にヴァーチャルな世界にのめり込む、仮に社会情勢が望むとしても、幼稚園は本来の幼児教育の道を進んでほしい。子ども達の生命エネルギー、活力こそが国を支えるのである。幼稚園と邦訳されたキンダーガルテンの使命は子ども達の有する「生命化」（*das Darlebung*）の能力を家庭に、地域に、国に、世界に広げることにある。

シュリュッケ（1912）によると、フレーベルは1839年11月11日にドレスデンからルイゼ・レビン（フレーベル夫人）に宛てた手紙の中で、「1840年春、ブランケンブルクからカイルハウへの散歩の途上、キンダーガルテンという名前が浮かびました。天国の園、もちろん、子どもの園、子ども達に再びお授けになり、与えたもうた天国」と書いている。1840年「幼児期と青少年期の作業衝動を育むための施設」は改称され、「キンダーガルテン」（*Kindergarten*子どもの園、日本では幼稚園と邦訳された）となった。フレーベルにとってキンダーガルテンは子どもの手に戻されたパラダイスであり、天国の園で遊ぶ子ども達の姿を通して、両親や大人を再教育する施設であった。子どもとともに生活し、様々な生命と共存している子どもの姿から生きる姿勢を学ぶことがフレーベルの幼児教育の基礎とも考えられる。フレーベル（1826a）が、「お父さん、御両親。私達は子ども達から私達に欠けたものを調達しましょう。私達は子どもの生命の生き生きとした力や創造力を既に持っていません。——私達は子どもの生命力を子どもから私達の生命の中へ再び取り込み

ましよう。私達の子も達から学び、子ども達の生命のやっとな聞き取れるほどの督促状を聴き、子ども達の心情の静かな要求を聞きましよう。さあ、私達の子もに生きようではないか！」と記述したように、子どもが有する生命力、子ども達から生じる「生き生きとした力」こそ、私たち大人が子どもから学ばなくてはならない内容と考える。大人が子どもを教えるのではなく、子どもが大人を生命化によって再教育する施設が幼稚園と言えよう。したがって、キンダーガルテンの教育課程も生命をテーマに構成されており、自然と共存する姿勢で自然に逆らわずに生きること、合自然的に自然と同化するための「生命化」を援助することがキンダーガルテンの使命であった。生命化の援助についてシュプランガー(1953)は、『フレーベルの思考界から』(Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt)の中で、「まず、内面的条件が満たされていなければなりません。家庭は生命の源泉と調和しており、家庭は事物の究極基盤で調和してはなりません。生命の源泉は神、事物の究極基盤は神なのです。各存在は万物の発達段階を神的なものの生命段階として、十分深く、純粹に通過し、各段階で存在の内面的なものを積極的に表現しなくてはなりません。この形成衝動は創造的生活や表現的生活の中で自ずから満たされるのです。既に創造的生活や表現的生活については、子どもの形成力に明らかであり、自然と人間性を伴った生命合一の中で、神的な創造法則が、いわば、もう一度明らかに考察される。労作、人間性における神性の現れの行為による証明が内面的なものの生命化なのです」と分析しているように、フレーベルにとって、生命化とは形成衝動(創造的活動衝動)を表現することに他ならない。遊びとは子どもが自由に自発的に自己の内面の創造性を表現した活動である、と考えるフレーベルはシラーの言葉「最高の感性は子どもの遊びの中にしばしばみられる」(Gar hoher Sinn liegt oft im kind'schen Spiel)をモットーに遊びの中に人類の未来を見た。遊びは表現活動であるから、子どもに「自由性」(die Freiheit)と「自発性」(die Spontantität)を保証する環境が必要となり、フレーベルは「合自然性」(die Naturgemäßheit)を提示する環境に生命化の道求めたのである。合自然的環境とは単に自然を規範とするのではなく、創造的生活や表現的生活において神のような形成衝動を現すこと「労作」(die Arbeit)している状態が自然と合一した人間の状態であり、労作を求める生得的傾向が子どもに備わっているとフレーベルは考えているわけである。不断の創造性を象徴する神が自然を創造されたのだから、芸術家の精神が作品に反映されるように、神の精神は被造物である自然に反映され、自然の一員である人間の精神にも不断の創造活動として継承されるわけである。神から全てが発しているから、合自然や神へ帰一したいという憧れは後天的に身に付くものではなく、生得的に被造物である人間に組み込まれていることになる。フレーベルは現象的な自然の模倣によって、人間の発展を図るだけでなく、自然の内面的な法則(生命法則)を知ることにより、自然と一体化(生命合一)することで自己の進歩発展を図ろうとしたとも考えられる。自然現象の内面の生命発展を模倣することによって、自然が人間を教育するわけである。

フレーベルの依拠する同一哲学によると、物と精神とは本質において同一であるから、身体的活動をすることは、精神の器を大きくすることになる。フレーベル(1826b)は、「精神的作業、精神活動の間に通る外部的作業、むしろ、身体的作業、外部に創出される活動や創作物に対する活動は、単に身体を強めるだけでなく、精神をも完全に凌駕し、精神活動の様々な方向を強める。精神は労作によって生気づける労作浴を(私は労作浴以上

によい言葉を示せない) すませた後、新たな力と生命とをもって精神的行為に向かうのです」と考えている。すなわち、労作とは人間が自覚的に自己の内的生命を形成し、表現していく試行錯誤の過程を意味している。人間の身体が自己の内的本質を行為を通して表現したり、具体的な行動に移したり、形あるものにしたたりする外面化と、人間の精神が外界の知識を概念や言葉を通して吸収したり、抽象的な判断推理を操作したり、イメージにしたたりする内面化との相互交流行為が労作であると解釈できる。すなわち、幼稚園での創作活動は神の生命創造を模倣する自己の創造性の表現活動なのである。したがって、フレーベル(1874)は、「だが、全ての活動は三重的なものであり、あるいは、三重的な行為において現れるものなのです。展開における行為、吸収における行為、両者の一致した行為、すなわち、比較と造形において現れるのです。この三重的な活動は子どもを取り巻く全てのものを受け入れます。例えば、個々の植物の中で受け入れているように、子ども自身の生命の中で受け入れているようにです。子どもの活動のこの三重性において、子どもの創造活動の三重性は、子どもの生命をも理解しなければならないし、子どもの創造活動に相応しく取り扱われなければならないのです」と結論するに至る。思考と行為、理解と表現は表裏一体であり、人間の内面性と外面性を相互交流する合自然的環境によって、労作が神性(創造性)と内外ともに一致するという点は重要である。精神と身体の間で、展開、吸収、一致を繰り返す創造活動こそ労作による神性の表現であり、人間が生きていることの証明と見なされうる。

フレーベルの世界観によると、万物はあたかも1本の生命樹であり、種子や実、葉や枝、幹や根が部分でありながら1本の樹木をなしているように、部分に優劣や上下の差がなく、不必要な部分など存在しない。樹木においては、各部分は、根、幹、枝、花、実、葉等の特有の機能を果たしている。しかし、全体は1本の樹という統一的な自然有機体なのである。樹液のように万物の間を循環している生命の媒体をフレーベルは「力」(die Kraft)と呼んでいる。フレーベル(1826c)によると、「固有の存在や固有の現象、事物の形状や形態には、究極の内面的基盤として、現象の帰結する統一性として、力の存在が常にあり、力から全ての多様性と統一性が現れ、生じ、力に全ての多様性と統一性が依拠している。作用している存在からみたり、外面的な現れに生じたものとしてみると、力は力の内面性において、力の本質において、唯一自らの存在にのみ規定されるだけである。私達が神的なものを学ぶことができるようなものとしての力の本質の観察から、私達個人の内面性、心情や生命を表現しているようなものとしての力の本質の観察から、自然が自然形態や自然の数え切れない諸形態や諸形状の背後に現し、直観させ、認識させ、洞察させているものの中に、自然の生き生きとした相互関係や内面的な相互関係、透かし見える高まり、洞察できる高まりを看破して見ることができ、自然の外面的な作用や、自然が誘導する方向を認識できるのです」と記述し、フレーベルは自然が象徴する神の法則を「力」が秩序づけているとして論を展開している。「力」は血液のように万物の諸部分を駆けめぐり、万物を1つの有機生命体と化す。万物が「力」という生命媒体によって生命化していることを知り、宇宙生命体の部分として生命賛美を表現することこそ、子ども達に安定した情操を保証する方法なのである。

Ⅲ. マニュアル化の問題点

明智専門大学（2001）と梨華女子大学校（2001）、山口大学（1999）の附属幼稚園や東菜セサク幼稚園（2000）の年間教育活動指導計画を見ても、生命に関する項目が随所にみられる。しかし、生命と関わる方法論やHow to面が目立ち、なぜ、生命と関わるのかというWhy面が簡略化されていることが問題ではなかろうか。動植物の飼育栽培という発想から動植物との共存、共生という発想の転換が必要となる。ウサギやニワトリ、カエルやバッタなどの小動物を檻やケースで飼育し、餌をやらなければ死んでしまう環境を作り、餌やり当番が世話をしないから死んでしまった、だから生命を大切にしましょう、という設定は生命に対する不遜に思えてならない。欧米のように野鳥のためにパンケーキを置いたり、水場を作って小動物がくる環境、観察し終わったら元の場所に小動物を返す姿勢が基礎となってほしいと考える。雑草を目の敵にして、バーナーで焼き尽くす姿を見て育つ子どもと、邪魔にならない場所に雑草を植え替えている姿を見て育つ子どもは、将来どのような人間になるかを知らなくてはならない。私たち大人の感性が、植物の育つ大地があるのに、大地の上に植木鉢を置き、水をやらないと枯れる不自然な環境に気づかない感性だからこそ、今、生命の教育課程が子ども達に必要なのではなかろうか。太陽が照り、そよ風が吹いていても、室内で蛍光灯や空調をつけている不自然な環境を不自然と感じない私たち大人の感性はマニュアル化によって生じたのだと考える。

絵本「大きなカブ」を使った保育を比較してみよう。韓国の「大きなカブ」を扱った保育は、じっくりと生産と収穫の喜びを説明しており、種を蒔き、カブが自然の恵みを受けて育つ様子、協力して引き抜かなければ抜けないほど大きく育てた自然の力、収穫したカブを分かち合う喜びなどの「生命に対する感謝と畏敬」が丁寧に語られていた。しかし、日本の「大きなカブ」を扱う保育は、カブを引き抜く真似だけをする「大きなカブごっこ」となっている点と、どの幼稚園でも同じ時期に同じ「大きなカブごっこ」をしているという点に恐ろしささえ感じる。みんなが同じことを同じ程度できるためにはマニュアルは必要であったと言えるが、マニュアルで育つと、創意工夫をする人やマニュアルを考え出す人は育たない。すなわち、同じ表現しかできないマニュアル人間が育つのである。マニュアルが合理主義（安い、早い、大量）の悪い面と結びついた時、粗悪で主体性のない、マニュアルを提示する人がいないと何もできない子どもが生まれる。いわゆる、無気力なイエスマンを作ることを見てきた反省から、試行錯誤する体験、他の幼児との関わりの中で学ぶ姿勢、自分なりの表現などの項目が改訂幼稚園教育要領に盛り込まれることになったのではなかろうか。

『母の歌と愛撫の歌』の「塔の風見、または、旗」という手関節と肘を動かす遊びの解説の中で、フレーベル（1911）は、「動いているものには動かしている元、動かしている力が根底にあることに気づき、じきに、生きているもの、生き生きとしたものには、生きていく力、生き生きとした力、生命を与える力が根底にあるという結論に至るのです」と記述し、動かされるものにはもとになる力が働いていることから、今、目の前で息づいている物には生命を与える力が根底に働いていることを、子どもが直観するようになると論じている。子ども自身の中に「生き生きとした力」（die lebendige Kraft）が内在してい

るからこそ、生きているもの、生き生きとしたものに共鳴し、無生物や言語疎通不可能な生物にも共感できるのである。幼児期に万物の有する「生き生きとした力」と触れ合うことは、万物と共存する道に用意された生命の門にほかならない。子どもに内在している「生き生きとした力」や躍動的な力を表現するリズムを強化するために、フレーベルは詩を付加したのだが、残念なことに日本では詩と動きを別なものとして扱ってしまった。しかも、フレーベルの幼稚園教育学をプロテスタントの神概念抜きで説明しようとしたため、関 信三が訳したドゥエイ (1876) の『幼稚園記』では万物の調和の賛歌が単なる教訓に墮している。詩を暗誦させ、問答法で確認した後、「兒女ノ各自ニ詩篇ヲ別誦スルニ當テハ殊ニ注意シテ其發音ヲ緩ヤカニシテ且ツ明カニ善ク聽者ヲ感動セシムヘキヲ要ス又其全員同誦スルトキハ嚴ニシテ而モ合調ナルヲ要ス而シテ其讀誦スルヤ毎句ノ結音ヲ急斷セシムヘカラス抑幼稚園ノ諸課ハ故意ニ丁寧精良ニ演習セシメ兒女ノ意中ニ終身憶持シテ忘レサルヲ要旨トス」と、表面的な方法論に訳されてしまった。

子どもの遊ぶ活動を援助する際、フレーベルは詩、歌、言葉で生命化する方法を採用した。詩、歌、言葉は子どもの感性、対人関係、自己活動を万物との生命共存を援助するためのものであって、子どもの活動を方向付けたり、制限する手段ではない。フレーベル自身が詩、歌、話を子どもに記憶することを決して要求してはならないと、繰り返し『第3遊具の手引書』の中に強調していることから、詩、歌、言葉は指導のための手段ではなく、本来、遊びに付随している生命賛歌であると見なされうる。フレーベル (1838a) が「自己意識は人間の本質に属する。自己意識は人間の本質と同一のものです。自己を自ら意識するようになるということは、人間のライフワークのような、子どもの生活の最初の課題なのです。自己を自ら意識するという課題の解決のために、子どもは誕生すると同時にある一定の場所と対象物に取り囲まれ、生き生きとした全ての被造物の周りを吹き回る気に取り囲まれ、人間的、精神的な言葉に取り囲まれるわけなのです。それゆえ、活気づける言葉、少なくとも活気づける歌が、各々の自発的な作業や、子どもとともにする遊びのためにも付随しているのです」と記述しているように、子どもを取り巻く環境には「生き生きとした力」がみなぎっている。私達人間を含めた被造物には、万物を製作した者の創造性が宿っており、被造物同士の環境調整のための相互会話がなされていることになる。すなわち、フレーベルの言う、「生命を与える力」とは被造物間の調整活動と考えられるであろう。

フレーベル (1838b) はロマンティークの立場から、「各々の対象物は、たとえ、もの言わぬ言葉で語るとはいえ、事物の現れを通して、絶えず事物から、事物について人間に語りかけており、大人以上に子どもに語りかけているのです。まるで事物の生命を子どもの生命に結びつけようとするかのようです。それゆえ、人間の外面的発達のために、特に人間の内面的、精神的、心情的な発達のためにも、単に事物の現象によって環境を明瞭な言葉で語るだけでなく、むしろ、子どもよりも大人がもっと早くから導かれ、事物のもの言わぬ言葉を単に聞き取るだけでなく、さらに自分自身でも聞き取れるようになるのは、全く本質的なことなのです。それゆえ、真っ先に注意深い母親が、同様に関与している保育者も、あなた方の人間的な感情に完全に忠実に試み、目に見える言葉だけでなく、このもの言わぬ事物に、早くから真の表現、理解できる音声表現、言語表現や歌の表

現を与える試みをしてください。表現を与える試みによって、もの言わぬ静かな無言の生命が、音や言葉を通して子どもに近づき、音や言葉によってももの言わぬ生命の中に一層具体的なものを子どもはすぐに発見し、感じ、そして、認識することでしょう」と記述し、子どもが生得的に有している直観能力に注意を喚起している。遊びによって、子どもは事物からのもの言わぬ言葉を直観し、事物の生命を聞き取っているわけである。しかし、残念ながら、私達大人は総合的感覚を忘れてしまったために、まず、聞き取れるようになることが必要になる。生命の律動性、無生物のリズムや生物との共同感情は、リズムでのみ聞き取れるわけであり、人間の言葉が持つ律動性、リズムから詩が、言葉とリズムから歌が生まれることになる。すなわち、詩や歌や言葉の持つリズムは、子どもの心情や発達状態へ働きかける手段ではなく、大人にとって子どものリズムを理解する方法であり、被造物の生命を聴き取る試みと見なされうる。

神の精神と自己の精神を合一することがフレーベルの人間教育の中心思想であったため、神と自然と人類との生命的合一や自然有機体的関係をフレーベルが論じる際に象徴は不可欠であった。神や自然、精神などのイメージが示す生命躍動感や自然有機体的暖かみが概念化によって失われることをフレーベルは避けたのではなかろうか。言語化したり、概念化する哲学的方法よりも、シンボル化して感覚知覚するという直観的方法を採ったと考えられるであろう。知能には動作性知能と言語性知能があり、幼児期の子どもの特質は動作性の知能にある。動作性知能は身体で覚えた知識であり、身体で考え、感覚で考えることが幼児期の特性と考えられるであろう。フレーベル（1851）は、「子どもが身の回りの外面現象全般の中でいくばくかの生命事実として、自分自身ではあるが、特別に、生き生きとした感覚や感情として知覚し、後には子どもの思考によってよく知り、たとえ、自分では言葉によって決して言い表せないようなものが、子どもの卵斑の最も外側に、一番最初に生じます」と、乳幼児期は感覚や感情によって外界を有機的生命体として知覚することを述べ、乳幼児期は言葉の前操作段階として、感覚的知能に至る感覚体験を積み重ねる時期であることを示唆している。生命を感覚として理解するためには試行錯誤体験が大切になる。したがって、フレーベルは教授の必然的な一般的な公式を、「まずやってみなさい。あなたの関わりから、一定の関係において、何が生じてくるかをみなさい。そして、生じてきたものがどのような認識にあなたを導くかをみなさい」としている。「まず行動」し、行動の結果を見て考え、また行動するという体験に重点をおいた教授方法を採るわけである。フレーベルにとって生命活動は創造性を伴うものであり、創造活動は精神活動を常に伴うものと考えられるであろう。フレーベル（1862）は、「創造者、万物の維持者、万物の支配者、全ての人間の父である神との絶えざる合一の内において、創造的活動は不安定な感情の段階ではなく、むしろ、精神的な認識と精神的な直観の段階であり、それゆえに、万物の生き生きとした関係、万物の精神的関係、万物の密接に一致した関係のような、精神的基盤、精神的根拠、精神的結果、精神的目的のより一層連続した注意と、強調と確認を伴います」と記述し、創造活動の精神性を強調している。したがって、身体で考える子どもの時期には、まず、行為すること、創造活動をすることから生命の教育が始まることになる。

IV. 生命遊びのカリキュラム

韓国と日本の生命遊びに関する共通したカリキュラムを抜き出してみる。

「春」

春の天気と人間の生活、春の植物と種、春の動物、春の昆虫、天地創造に感謝

「夏」

夏の天気、水、涼しい夏、健康な夏、健康と衛生、汚染と環境保護、水たまり作り、シャボン玉作り、貝殻拾い、波遊び、雨、雨中散歩

「秋」

秋の天気、植物の変化、秋に実るもの、落ち葉拾い、マツボックリ・ドングリ拾い、マツボックリ投げ

「冬」

冬の天気、氷の観察、氷にアナあけ、氷や雪を使ったままごと、雪ダルマ、雪合戦

「動物」

幼稚園の動物、かわいい動物、動物園の動物、農場の動物、消える動物、動物保護、チョウ・アリの観察、オタマジャクシ飼育、ウサギ・カメの飼育、ダンゴムシ・カタツムリ探し、アメンボ・チョウチョ・バッタ・トンボ・カマキリ・カナブン・セミ・コオロギ採り、ニワトリの卵を調理する

「農業学校」

ジャガイモ植え、春の観察、イモ植え、家族遠足、ジャガイモ収穫、インゲン、トウガラシ、ナス、若葉、ヨモギ採り、ナズナ採り、芝の観察、花壇作り、花の名調べ、夏の山の観察、トウモロコシ・イモ収穫、木の実を食べる、キュウリ・トマトを料理する、ダイコン・ハクサイの手入れ、ダイコン・ハクサイの収穫、秋山の観察、キムチ漬け、焼きイモ、冬山の観察

「自然物の造形」

マラカス作り、マツボックリ・ドングリの作品製作、ピーピーマメを鳴らす

上記の内容を検討してみると、身近な生命に限られていること、育てるよりも採る内容が多いことに気づく。

フレーベルが1840年に創始したキンダーガルテンは単なる遊具による遊びをする施設ではなかった。生命をテーマとする遊びを通して、生命環境の中で幼児期を過ごす施設だった。晴れた日には屋外で遊び、庭園で労作をしたり、散歩や自然環境に関わる活動が大切にされていた。むしろ、外遊びに適さない日に遊具や作業具で遊んだのである。すなわち、外的世界である自然に即して子ども達を養育しようとする「合自然性」を提供する環境であった点が重要である。「自然」(die Natur)の状態では太陽に向かって真っ直ぐ育つ植物が、人間の手に渡ると、盆栽のように、切られたり、曲げられたりしてしまうことになる。そこで、フレーベルは人間教育を自然の手に委ねようと考え、指導(命令、制限、干渉)しないという「環境」(die Umgebung)による教育を提唱した。すなわち、野生の

植物が種を拡げるために周囲の環境調整をするように、花に例えた子ども達に、フレーベルは「自己を教育する環境」(キンダーガルテン)を用意したと考えられるであろう。ルソーの思想影響を受けたフレーベルは、自然こそ人間に代わって子どもを教授し得るものであると考えるに至ったのである。

キンダーガルテンが明治9年(1876)に日本に幼稚園として導入された頃は、「合自然性」(生命遊び)、「人間性」(模倣遊び)、「創造性」(造形遊び)は活動の3本柱だった。しかし、時とともに合自然性を伝える生命遊びは形骸化し、本来の自然哲学で扱う「合自然性」が自然科学で扱う「自然観察分析」にすり替わってしまった。トリになって風を切って飛んでみよう、山になって木を受け止めてみよう、などの幼児期特有の「感情移入」を發揮する模倣遊びも、単なる「ごっこ遊び」に置き換わっていった。製作者の精神が作品に反映されるように、神の作品である人間が生命の創造を表現する「造形活動」も、飼育栽培や「製作技術」が大切にされるようになった。生命に対する喜び、感謝、畏敬をテーマとする幼稚園にあって、上記の教育課程はあまりにも少なすぎると考える。

生命の律動性、無生物のリズムや生物との共同感情は、リズムでのみ聞き取れるわけであり、人間の言葉が持つ律動性、リズムから詩が、言葉とリズムから歌が生まれることになる。すなわち、詩や歌や言葉の持つリズムは、子どもの心情や発達状態へ働きかける手段ではなく、大人にとって子どものリズムを理解する方法であり、被造物の生命を聴き取る試みと見なされうる。幼稚園での歌、詩、言葉は遊びに付随し、遊びは神と自然の創造性を表現したものであり、神と自然は歌、詩、言葉によって讃えられることになる。

フレーベルが考えた数百曲にのぼる歌は、ロバート・コールの作曲によって、1844年に『ルードルシュタットのそばのブランケンブルクのキンダーガルテンにおいて小さい子どもに実施されたボールでの遊びのための100の歌』として出版された。1850年の『フリードリッヒ・フレーベルの週刊誌。全ての人間教育の友のための統一誌』には、エミリエ・レーチェルフの作曲した「ヤコブの梯子の歌、第1・第2」「ヤコブの梯子の歌、第3、第4」「ヤコブの梯子の歌、第5、第6」という宗教歌、アルヴィナ・ミッデンドルフが作詞作曲した「さあ、私達の子ども達に生きよう」、N.ヘルマンの作詞作曲した「私達の子ども達」、ベーゼンベルク作詞N.ヘルマン作曲の「戸外での礼拝」、フレーベル作詞作曲の「ボール遊び」、「散歩」、付録としてF.ミュール作曲の「4人の兄弟」と「春」「夏」「秋」「冬」が掲載されており、E.メンガー作詞作曲の「庭」、フリードリッヒ・アルテス作詞作曲「時計」、指の運動の歌「ホトトギス」、ミューラー作詞作曲の「カブトムシの歌」、ロバート・シャープの「子守り」、同じくシャープの「幸運」、G.W.フィンの「私の庭」、ヨハネス・シュタンゲンベルガーの「キンダーガルテンで遊びと作業を始める時の歌」、「簡単な輪の遊び」と「星遊びと花遊び」、同じくシュタンゲンベルガーの「子どもの友のイエス」と「ドイツのオークの葉の冠」、「バラ」などが楽譜付きで掲載されている。すなわち、幼稚園での詩歌やお話は、神(父)、子ども(子)、自然(精霊)に結びついた生命讃歌であったことを忘れてはならない。

フレーベルが『母の歌と愛撫の歌』の中で紹介した手遊びも、一人で練習することを想定したものではなく、生命をテーマとした二人や大勢で楽しむ遊びであり、母と子のよう

な共同感情を表現する関係で遊ぶことが前提になっている。フレーベル（1911）が『母の歌と愛撫の歌』で紹介された、「塔の風見」（Hähnchen auf dem Thurme）、「お終い」（'s ist all=all）、「草刈り」（Grasmähen）、「ニワトリさんおいで」（Hühnchenwinken）、「ハトさんおいで」（Täubchen winken）、「小さなサカナ」（Fischlein）、「縦に横に」（Langweis=kreuzweis）、「クッキー作り」（Patsche=Kuchen）、「トリの巣」（Vogelnest）、「花籠」（Blumenkörbchen）、「ハトの家」（Taubenhaus）、「親指はスモモ」（Däumchen und ein Pfläumchen）、「親指の挨拶」（Däumchen neig dich）、「親指でひとつ」（Beim Däumchen sag ich Eines）、「指ピアノ」（Fingerklavier）、「無邪気な姉妹」（Die Geschwister ohne Harm）、「塔の上の子ども達」（Die Kinder auf dem Thurme）、「小ウサギ」（Das Häschen）、「オオカミとイノシシ」（Der Wolf , Das Schwein）、「小窓」（Das Fensterlein）、「窓」（Das Fenster）、「炭焼き小屋」（Die Köhlerhütte）、「大工」（Der Zimmermann）、「小さな橋」（Der Steg）、「中庭の門」（Das Hofthor）、「庭の門」（Das Gartenthor）、「小さな園丁」（Der kleine Gärtner oder das Gießkännchen）、「車屋」（Der Wagner）、「建具屋」（Der Tischler）、「騎手と良い子」（Die Reiter und das gute Kind）、「店屋と少年」（Der Kaufmann und der Knabe）などの手遊びに見られるように、遊びを利用した指導や、遊びによる機能訓練が主たるねらいではない。むしろ、遊びを媒介とした感情交流、共感、信頼という共同感情を表現する関係において、生命を賛美し、生命共同体の理解と共存が尊重されることが特徴的である。すなわち、幼稚園での遊びは有機的で生命躍動の人間関係の中であることが前提となっているわけである。

V. まとめ

表現活動は自由性と自発性が保証されなければ成立しない。

大人が干渉した他律的表現は、どんなに目立たずかかわっても、子どもの創意工夫につながる自由表現を生み出さないことを指摘しておく。時間や評価に縛られた教師が関わっても、時間内の表現やよい評価を得るための表現を子どもがするようになる。生命に対する感動がじっくりと子どもの中で醗酵し、表現されるにはたっぷりと時間を必要とする。評価を気にすることのない自己表現を楽しむからこそ自由表現なのである。子ども達の楽しさや喜びを伴う生命表現は、私たち大人自身が生きる喜びや生命への畏敬、感謝の心を表現していて初めて可能になるのである。

教師による誘導保育は、どんなに巧妙に設定しても、子どもの自主的表現を制限してしまうことを指摘しておく。檻や観察ケースに入れた小動物と触れ合う環境を用意しても、監禁していじめてもよい弱い小動物を知らせることになる。鉢に植えた植物は大地の恵みを受けることができず、植え替え時に鉢一杯に詰まった根や小さな底アナから大地を求めている根を見ることは生命に対する不遜を教えることになる。思いやりややさしさを培うために生命と関わる環境を用意しても、私たちに不自然さがわからない限り、逆効果になる。「教師による誘導」から「環境による援助」への移行の際には、生命を基礎にした合自然環境を整える感性が私たち大人に要求されるのである。

生命に関するカリキュラムの在り方を考える際、生命賛美を伴わない命の教育は存在しないことを忘れてはならない。したがって、私たちは「生命と結びつかない散歩カリキュラム」や、「生命を表現する力の弱い環境」を今こそ問題にしなくてはならないのである。

引用・参考文献

明智専門大学（2001）：年間教育指導計画：明智専門大学附属明智幼稚園

教育部（1998）：幼稚園教育要領解説：教育部：pp. 18-19

教育部（2000）：幼稚園教育要領教育部告示第1998-10号：教育部

金 玉蓮（1986）：韓国幼児教育研究：文音者：pp. 11-12

シュリュッケ（1912）Schrücke Kurt：Louise Fröbel. Fröbels Zweite Gattin：Fröbelhause：pp.32-33

ドゥエイ（1876）Douai.A 関 信三訳：幼稚園記巻之一：東京女子師範学校：pp.22-23

東菜セサク幼稚園（2000）：幼稚園教育課程運営計画：東菜セサク幼稚園

フレーベル（1911）Fröbel Friedrich：Mutter = und Koselieder：Ernst Wiegandt：pp.63

フレーベル（1826）Fröbel Friedrich：*Die Menschenerziehung, die Erziehungs =, Unterrichts = und Lehrkunst, angestrebt in der allgemeinen deutschen Erziehungsanstalt zu Keilhau;dargestellt von dem Stifter, Begründer und Vorsteher derselben, Friedrich Wilhelm August Fröbel. Erster Band. Bis zum begonnenen Knabenalter*：Allgemeinen Deutschen Erziehungsanstalt. Keilhau：Commission bey A. Wienbrack：a. pp.109 b. pp.298-299 c. pp. 203-204

フレーベル（1838a）Fröbel Friedrich：Der Ball, das erste Spielwerk der Kindheit：In：“Kommt, laßt uns unsern Kindern leben !”. *Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben*：Nachlaß Friedrich Fröbel：Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg：Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit：No 4.Am 21. Januar 1838：pp.34

フレーベル（1838b）Fröbel Friedrich：Die Kugel und der Würfel. Als zweites Spielzeug des Kindes：In：“Kommt, laßt uns unsern Kindern leben !”. *Ein Sonntagsblatt für Gleichgesinnte und unter thätiger Mitwirkung derselben*：Nachlaß Friedrich Fröbel：Friedrich Fröbel Museum. Bad Blankenburg：Anstalt zur Pflege des Beschäftigungstriebes der Kindheit：No 11. Am 11. März 1838：pp.84

フレーベル（1851）Fröbel Friedrich：Anleitung zum rechten Gebrauche der dritten Gabe des entwickelnd erziehenden Spiel = und Beschäftigungsganzen：Des einmal allseitiggetheilten Würfels, “Die Freude der Kinder”, gegeben von Friedrich Fröbel：Der Kinderbeschäftigungsanstalt. Bad Liebenstein：Nachlaß Friedrich Fröbel 215：Friedrich Fröbel Museum：pp.3

- フレーベル (1862) Fröbel Friedrich, Wichard Lange : Plan einer Armen = Erziehungs = Anstalt für den Canton Bern. (Willisau, am 20. Oktober 1833) : In : *Aus Fröbel's Leben unterstem Streben. Autobiographie und kleine Schriften* : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 1 : Th. Chr. Fr. Enslin : pp.458
- フレーベル (1874) Fröbel Friedrich, Wichard Lange : Vortrag, gehalten in Gegenwart Ihrer Majestät der Königin von Sachsen, zu Dresden im Zwinger = Pavillon den 7. Januar 1839 : In : *Die Pädagogik des Kindergartens. Gedanken Friedrich Fröbel's über das Spiel und die Spielgegenstände des Kindes* : In : *Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften* Band 2 : Th. Chr. Fr. Enslin : pp.225
- 柳 岸律 (1986) : 韓国の伝統育児方式 : ソウル大学校出版部 : pp.31-35
- シュプランガー (1953) Spranger Eduard : Aus Friedrich Frobel's Gedankenwelt : Quelle & Meyer : pp.33
- 山口大学 (1999) : 教育課程 : 山口大学教育学部附属幼稚園
- 梨花女子大学 (2001) : 年間教育指導計画 : 梨花女子大学校附属幼稚園